嘉永再建和歌山城天守の建築構成

松岡利郎

はじめに

先に本研究誌第八号で拙稿「和歌山城天守図にみる建築構成」において、弘化三年（一八四六）焼失以前の建築構成を考察してきた。これは中村家所蔵の絵図類をもとに検討してみたものである。一方、嘉永三年（一八五〇）に再建が成り惜しくも戦災で焼失した天守については、戦前の関連書籍に案内・解説されており、具体的な建築構成を知ることができる。すでに調査され明確な資料が残っていたので昭和三三年に鉄筋コンクリート造の再興でありながら、外観意匠・規模形式は戦災焼失前のものに忠実にならっており、かつての容姿を目前にすることが可能である。

ただし戦災焼失前に旧国宝文化財に指定されていたものの、平面図を実測しただけで立面・断面図が無く、再建設計にあたった藤岡通夫博士は戦前の研究調査で撮影した写真および藩大工棟梁水島家伝来の建築指図を参考にするなど苦慮されたという（藤岡通夫『城と城下町』所収「戦災焼失を再建した和歌山城天守群」）。水島家所蔵の建築指図は嘉永の天守再建を担当した際に作成、立面図二枚（南正面・東面）と建地割圖二枚（西側・北側）が伝えられてきたもので、外観・軸組・内部構成などが詳しく知られる。

残念ながら水島家伝来の建築指図は空襲で失われたらしいが、幸いなことに紀州徳川家の菩提所長保寺にも和歌山城関係の古図を所蔵されていたことが知られた（読売新聞和歌山支局編『和歌山城物語』）。いずれも貴重な史料であることにかんがみ、自身も長保寺へ参拝のため訪問し閲覧調査する機会に恵まれた。

本稿では嘉永再建の和歌山城天守について、長保寺所蔵の古図ならびに戦災焼失前の資料を以って、どのような建築構成をとっていたか検討し、さらにアイソメ図で再現することを試みたいと思う。

史料の検討

長保寺所蔵の和歌山城関係古図・指図は、県立博物館の仏画展開催にあたって調査・整理した時に見出されたものである（当寺住職のご教示による）。そこで閲覧しえた史料を検討してみる。

A 天守各重平面差圖〈写真1〉

これらの上袋に「御天守　地差圖三枚・土臺差圖壱枚・碁盤梁差圖弐枚・小屋差圖三枚、都合九枚」とあって、三重各階の平面図と土台図・梁組み伏図と屋根掛け図が入っている。九枚いずれも三九㌢×二八㌢の大きさで、一間＝六尺五寸＝約一九七㌢を六分五厘＝一〇㍉ほど＝に、すなわち縮尺百分ノ一として作成している。方位は北をのぞく東・南・西が示される。それぞれ画かれた内容を読みとってみよう。

まず、**①御天守下之御重地差圖・②御天守中之御重地差圖・③御天守上之御重地差圖**は各階の平面図で、「但六尺七寸間」と添書きしてあるように柱間寸法を設定・統一している。

下之重〔一階〕は斜め平行四辺形で入側まわりが歪みをなすため、柱間ごとに詳細な幅寸法を書込んであるのが注目される〈**図1**トレース読取り参照〉。柱間装置（開き戸・引違い戸）や窓・階段・石落などを表示したり、そのうち西入側の柱八本と中央板張囲い三室（内蔵）の柱四本に朱印して「此印御柱中之御重江通り柱」と記入、かつ図の左わき下に「中之御重江通り柱拾弐本」と添書きしており、柱立て構成が明確に分かる。

中之重〔二階〕も同様で、身舎まわりに破線および中央間に実線を引き、イタハリ・上り口・テスリ・中段折れの階段・踊場・高窓などが示される。南側張出部の斜め柱間に幅寸法を記入、西側の外柱八本と身舎部のうち四本に〇印を付けて「此印御柱下ノ御重ヨリ通り柱」、また身舎部の東入側の柱九本に朱印して「此印御柱上之御重江通り柱」、図の左わき下に「下之御重ヨリ通り御柱拾弐本、上之御重江通り御柱九本」と添書きしてあって通柱の位置が知られる。

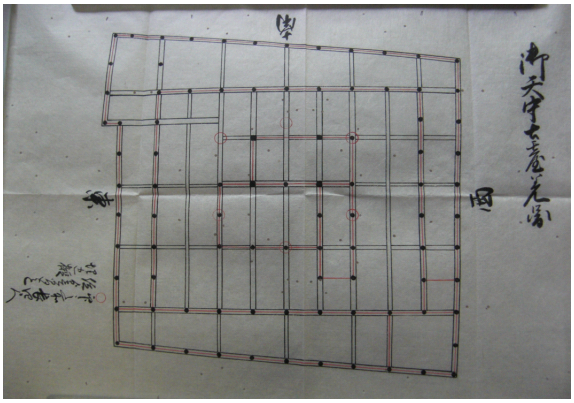
上之重〔三階〕でも同じく東側の外柱に〇印を付けて「此印御柱中之御重ヨリ通り柱」と記入、図の左わき下に「中之御重ヨリ通り柱九本」と添書きする。なお上之重の桁行において、両端間を除く三柱間は長サ三間半〔六尺七寸×三間半＝二三尺四寸五分〕を三等分するので「七尺八寸一分六リ六も」ときわめて微細な寸法が記入してある点は留意すべきである〔よって二三尺四寸五分／3＝七尺八寸一分六厘六毛…と算出される〕。

それに各重平面図ばかりか土臺・碁盤梁之圖（梁組み伏図）と小屋差圖（屋根掛け図）も画かれ、さらに建築構成を知ることができるのは重要である。

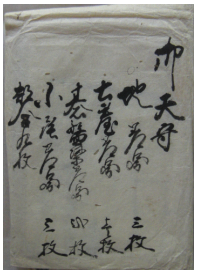
④**御天守土臺差圖**は土台を複線で引き、その上に柱割し、朱線で下之重の平面間取りを示す。とくに中央部へ六角形の頂点六ヶ所に朱丸を入れ、「〇印之所長四尺位ヨリ壱間迄埋込枘」と注記がなされており、基礎固め杭を地中へ打込むことも考慮している。

次に⑤**御天守下之御重碁盤梁之圖**は柱上の梁組みを示し、一階の平面間取りと柱立割は墨書き、および二階の平面間取りと柱割は朱書きで色別してある。西側の南から三間目外に「此二タ筋引ハ本桁」、その二間隣り（南から五間目）入側内に「此二タ筋引ハ上木高サニ片蓋差物」と記入する。それに北・東・南三方の入側より半間出る筋を庇の繋梁上に渡す「柱持梁」と明記し、二階の外まわりをなすことが了解できる。梁組み交差するところの画き方を見れば東西方向が下梁で、その上に南北方向の梁が一間ごとに架ける工法をとっているのが分かる。ただ、東西方向の下梁は中央北寄り六坪室（内蔵）の柱割にしたがって一間ごと三筋に配されるものの、北方は通柱二本だけなので二間スパン離し入側筋に、南方はスパン長サ三間の中筋（中央四坪半室の南辺柱列にあたる）に渡されて両端が入側柱一間の差物（差鴨居）に掛けるよう図示している。

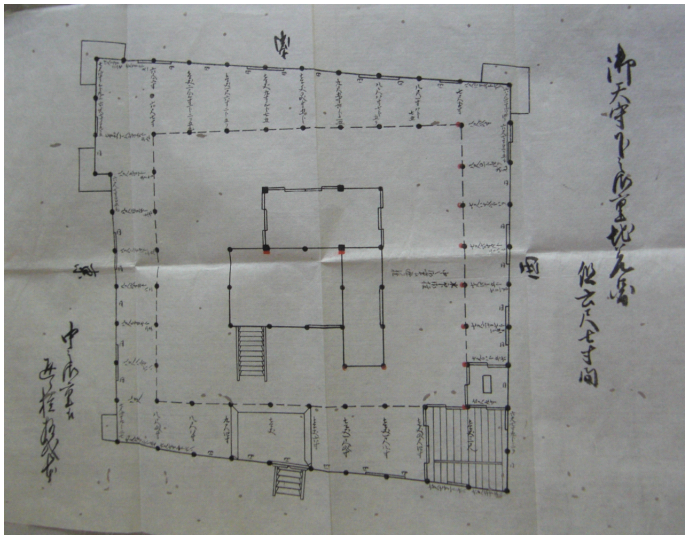
写真１．Ａ 天守各重平面差圖（その１、長保寺所蔵）



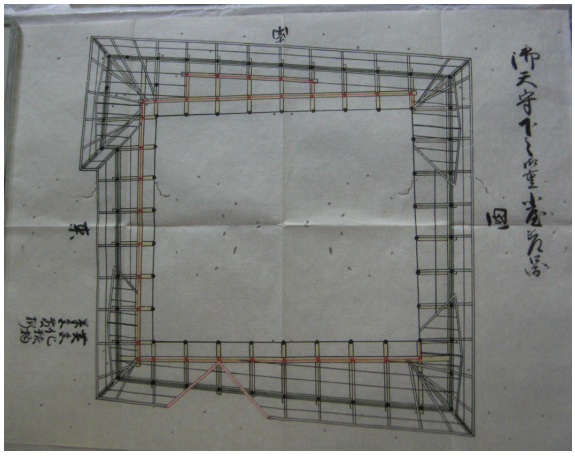
④ 土臺差圖▲



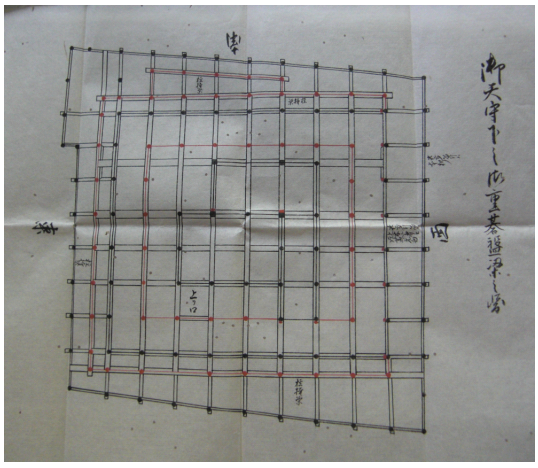
▲上袋表題



① 下之重地差圖▲

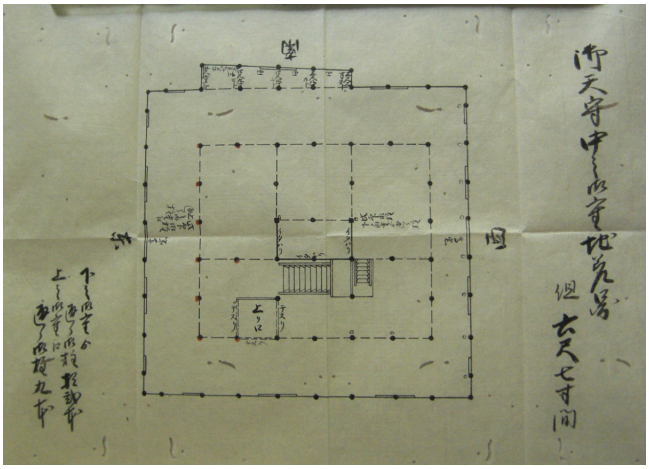


⑦ 下之重小屋差圖▲

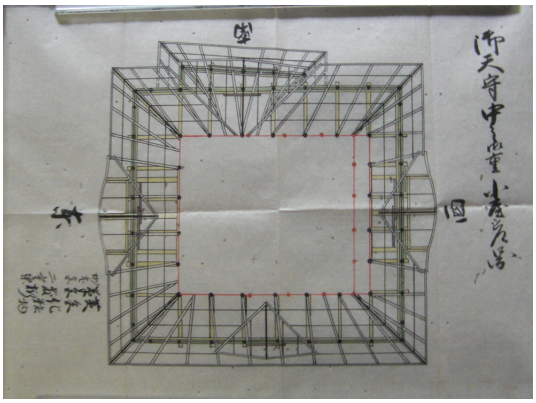


⑤ 下之重碁盤梁之圖▲

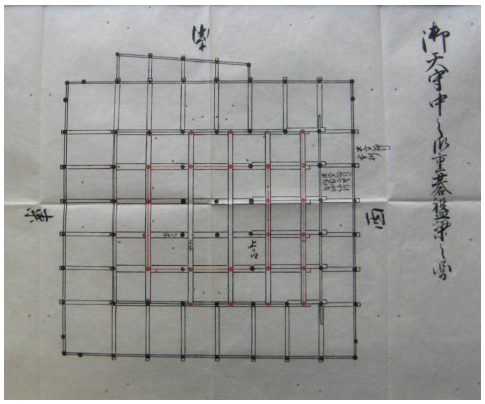
写真１．Ａ 天守各重平面差圖（その２、長保寺所蔵）



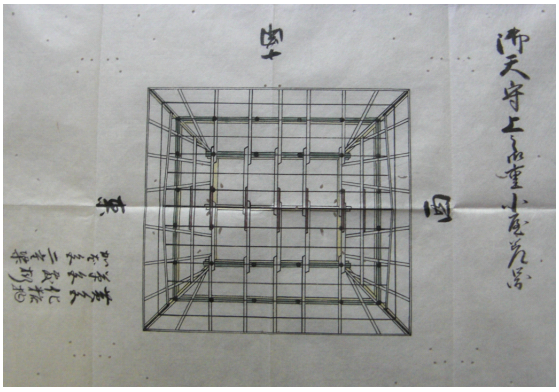
②　中之重地差圖▲



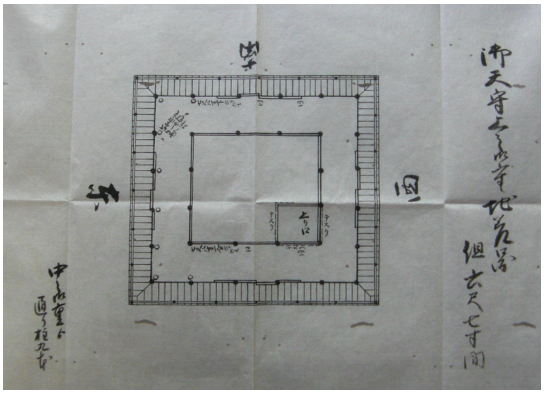
⑧ 中之重小屋差圖▲



⑥ 中之重碁盤梁之圖▲



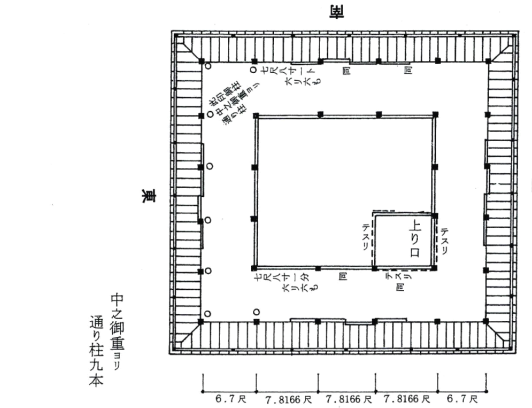
⑨ 上之重小屋差圖▲



③ 上之重地差圖▲

御天守上之御重地差圖

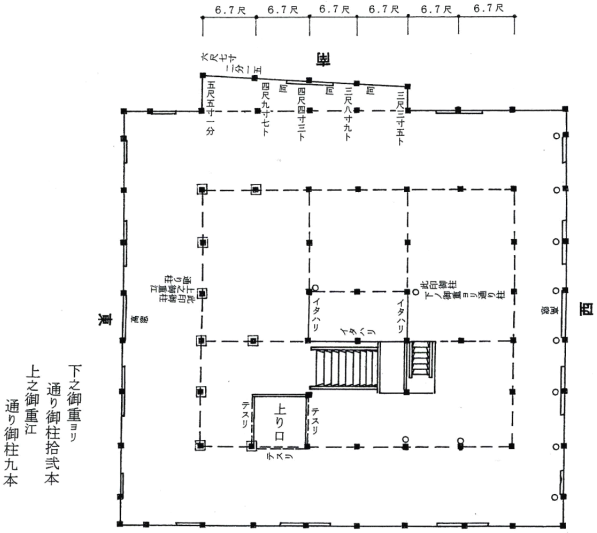
但六尺七寸間



中之御重ヨリ
通り柱九本

御天守中之御重地差圖

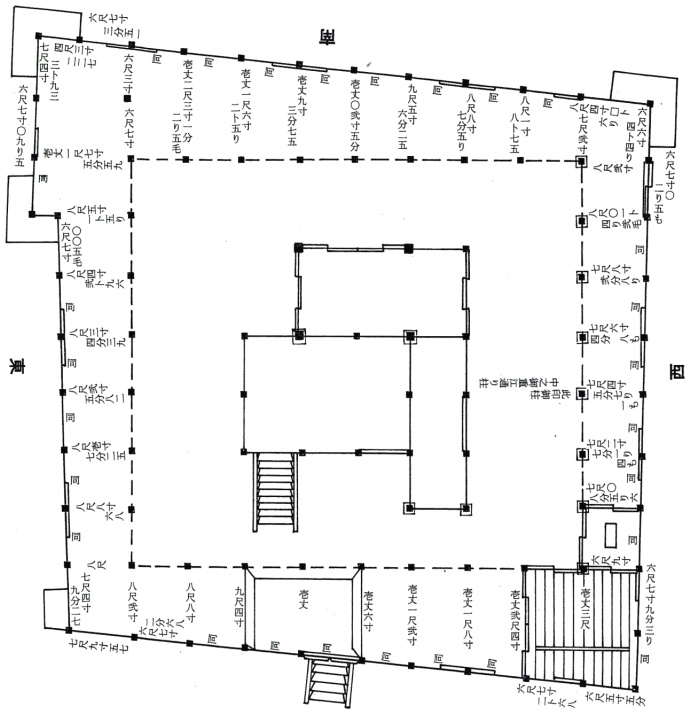
但六尺七寸間



下之御重ヨリ
通り御柱拾弐本
上之御重江
通り御柱九本

御天守下之御重地差圖

但六尺七寸間



中之御重江
通り柱拾弐本

また⑥**御天守中之御重碁盤梁之圖**も同様に作図されており、西辺の南側から二間目外に「此二タ筋引ハ内室と野屋祢境桁」と記入する。ここでは上之重（三階）が一間半あて逓減するのに対し、西入側が幅一間しかないため（他の入側三方は幅一間半ちょうど）、下梁（図では「下木」と書込み）は庇繋梁と二段の掛継ぎにして上梁（上木）を架けねばならない。おまけに上之重の桁行が先述の如く身舎部長サを三等分する関係（七尺八寸一分六厘六毛…）で中之重の柱筋よりずれて架けるべく工夫してあり、梁組み伏図にみるような画かれ方となっている。

続き、⑦**御天守下之御重小屋差圖**・⑧**御天守中之御重小屋差圖**・⑨**御天守上之御重小屋差圖**は屋根掛け図で、下之重と中之重が四方葺降し、上之重が最上層入母屋で、入側の庇繋ぎ梁・桔木・母屋の配付や比翼入母屋・千鳥破風・唐破風の取付け位置、軒まわりを示す。ここでは下階の規模と柱割を黒色、上階の規模と柱割を朱色で表し、図の東わきに「黄色化粧物、草色敷桁、加ば色二重梁」と黄色・緑色・樺色（赤みをおびた黄色）の識別を例記している。注意されるのは下之重では斜め歪みのため東南・西北の隅木尻がやゝ振れ位置に入込むおさまりを配慮、また中之重では身舎まわりに黒の柱割を付けるが、それが上之重外まわりの規模を受継ぎながら西側の半間内寄りに朱線を二重に引き、柱割も南辺・北辺（桁行になる）でズレをみせるようにしていることである。後者は先述の如く中之重の西入側幅が他三方より半間短いための措置を考えている（したがって中之重の身舎桁長サは六間×六尺七寸＝四〇尺二寸、上之重の桁長サは五間半×六尺七寸＝三六尺八寸五分）。

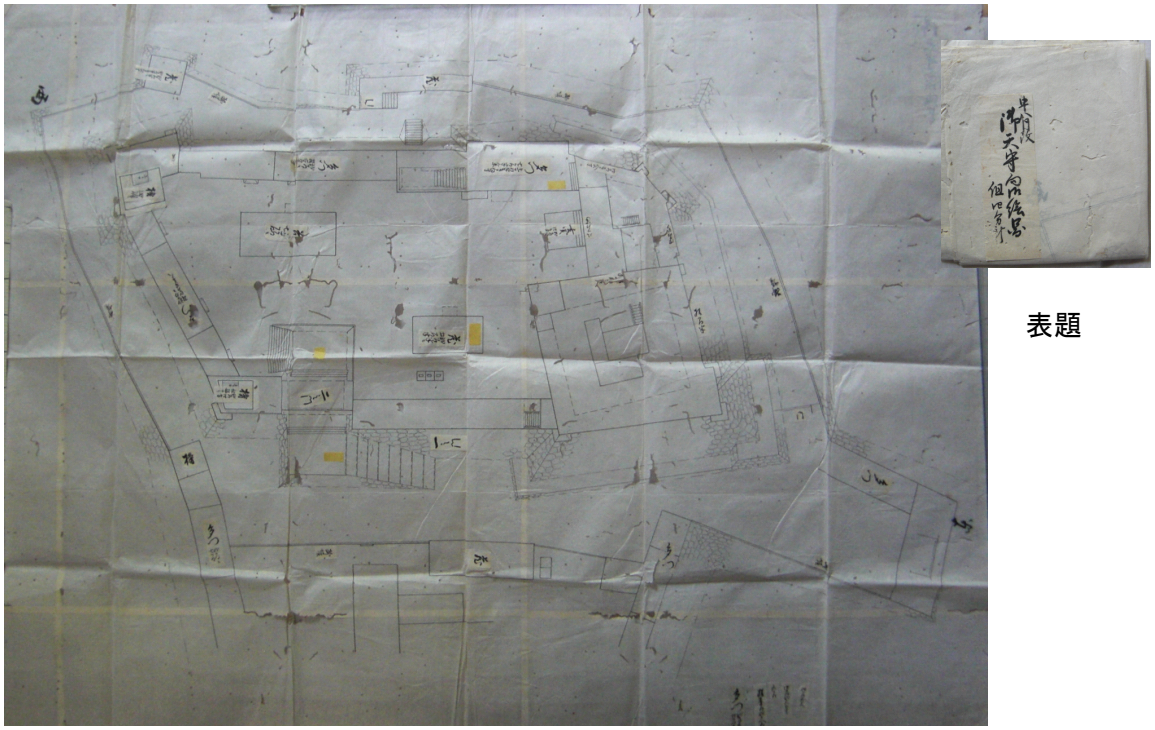
B 御天守向御絵圖〈写真2〉

折畳みの表題に「申八月改御天守向御絵圖但四分計」と記されている。図上で見ると、楠門へ取付く石段が東より右折れ上がりに入る形態を示しており、それが改変されたのは江戸後期で干支から嘉永元年（戊申、一八四八）か万延元年（庚申、一八六〇）のいずれかであろう。前者とすれば天守の再建工事が始まる時期にあたると考えられる。

和紙の大きさ八六㌢×六五㌢、一間（六尺五寸）を四分とする縮尺（ちまり一六二・五分ノ一）で天守基壇まわり（天守曲輪）の平面図を正しく画いている（ここでは帯曲輪付段沿いの南先にある建物が略されている）。建物平面や配置が分かり、隅櫓・多門（長櫓）・城門の名称や規模寸尺を付箋する。これら付箋各所は、天守の東辺「拾間半」・北辺「拾間三尺」、小天守の東辺「四間弐尺」・西辺「八間半」・北辺「四間壱尺五寸」・「玄関弐間半四方」、台所東半は「多門三間半壱尺弐寸ニ七間半余」、その西続き北多門「多門弐間ニ拾六間□□」、乾櫓（北西隅櫓）の東辺「三間」・二階「櫓弐間半ニ三間」、西多門「多門弐間ニ拾弐間半壱尺」、二ノ門櫓（西南隅櫓）二階「櫓弐間四方但振アリ」と記されている。さらに東倉庫（塩蔵）は「蔵弐間半ニ五間半」、西倉庫（鉛蔵）は「蔵三間ニ七間」、また乾櫓の北下にある楯蔵は「蔵弐間半ニ弐間半壱尺六寸」、帯曲輪南付段沿いの西側に「多門弐間ニ七間」と知られ

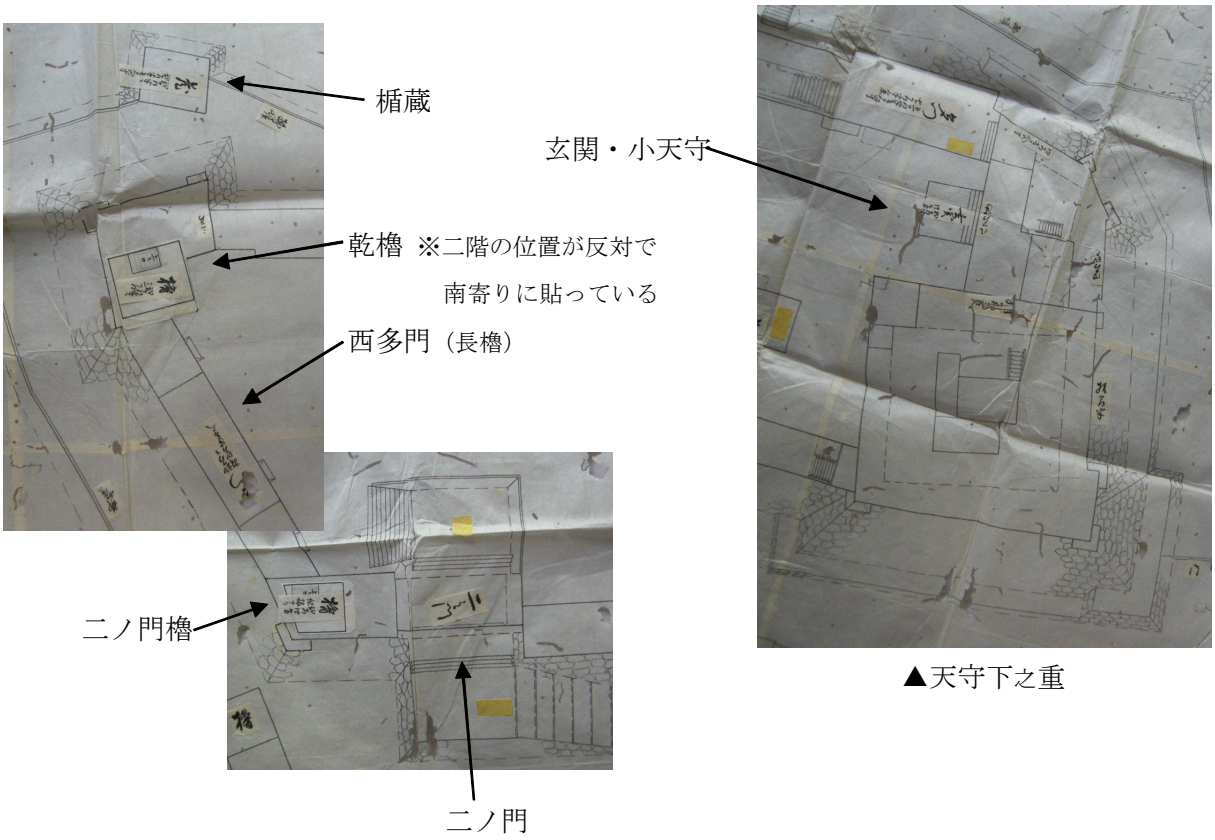
る。

他に付箋五点がはがれ落ちて図の右下にまとめ留めおかれている。めいめい「拾壱間弐尺五寸」は天守南辺に相当、「多門弐間五尺五寸・四間五尺弐寸」は台所西半か、「四間弐尺五寸」は二ノ門櫓の南辺か、「五間」・「四間五尺」は乾櫓の外辺かと思われる。また図中に黄色の付印四ヶ所（楠門の前外側と桝形内・東倉庫・台所東南部）みられるが、それぞれ意図する貼付け位置については解釈しにくい。それに楠門へ上がる石段そばの付箋「一之門」も貼り間違いで、天守台東南方すそ先の城門を指すべきであろう。また、乾櫓と二ノ門櫓には二階の掛紙を貼付けているが、天守と小天守では一階を示すのみで上階の平面図は付けていない。ただし乾櫓二階は階段口の位置が反対で南寄りに貼られている。



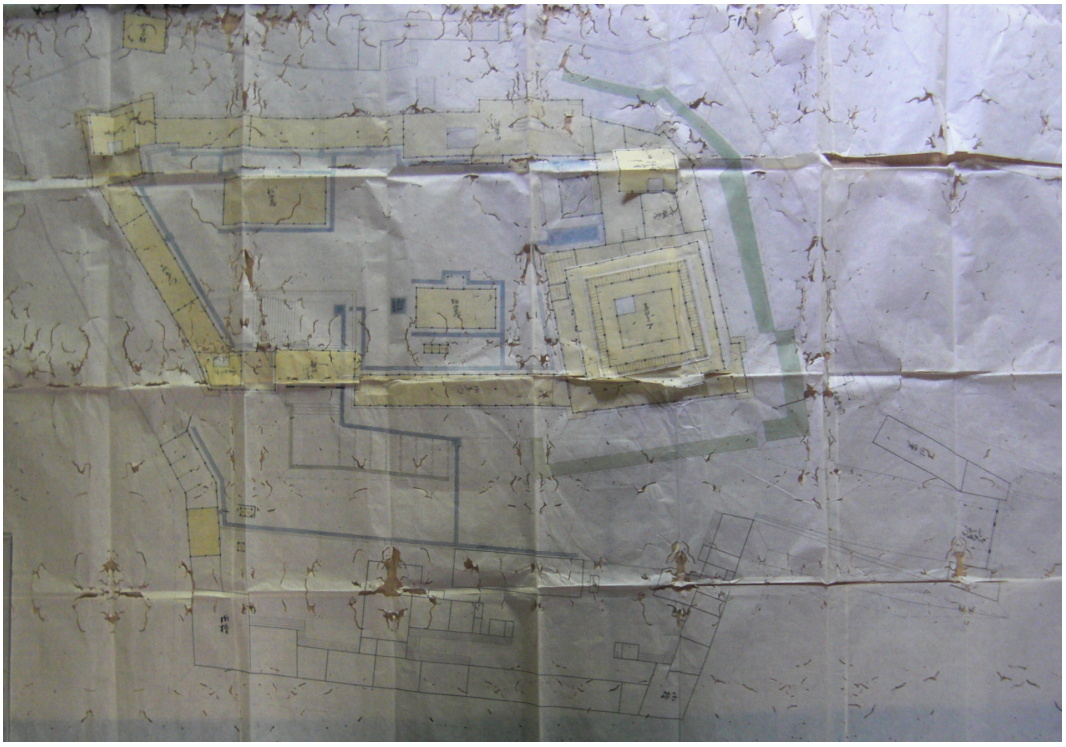
表題

▲ 全体図

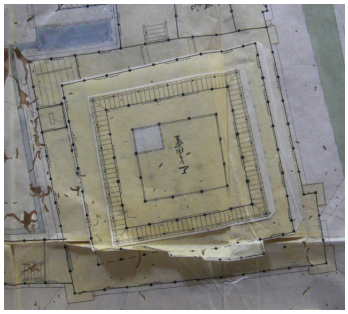


▲天守下之重

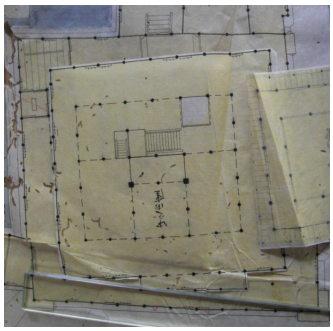
写真２．Ｂ 御天守向御絵図（長保寺所蔵）



▲ 全体図

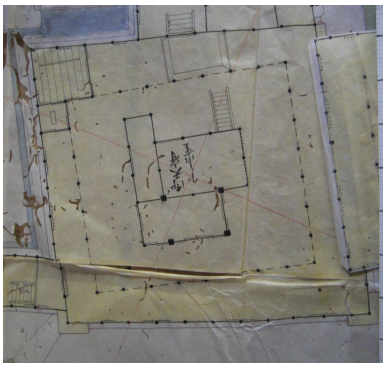


▲天守上之重



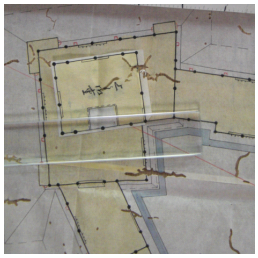
▲天守中之重

（大黒柱は二本）

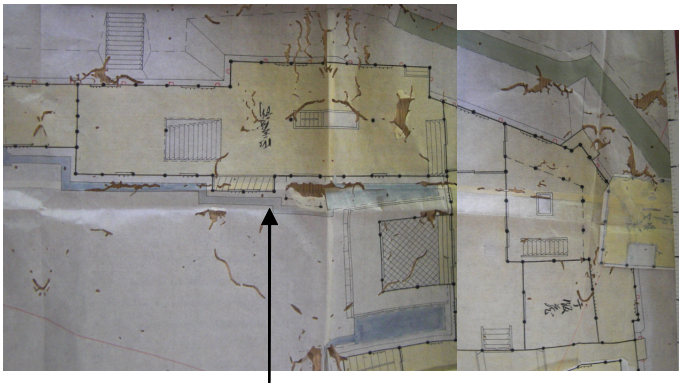


▲天守下之重

（太い柱の位置に注目）

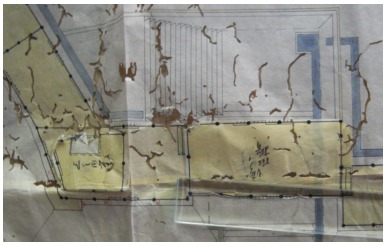


乾櫓



台所

玄関・小天守



二之門櫓　　二之門

写真３．Ｃ 天守曲輪平面古図（長保寺所蔵）

C 天守曲輪平面古図〈写真3〉

表題は無いものの、B「御天守向御絵図」と同様に天守曲輪周囲の平面図があますところなく画かれており、良質な史料である。和紙の大きさ一四二㌢×一〇三㌢、一尺を一分、すなわち縮尺百分ノ一とし、天守曲輪まわりの建物の平面に柱割があり黄色で彩色する。そのうえ天守の二階と三階、小天守二階、乾櫓二階、二ノ門櫓二階、楠門上階（渡櫓）の掛紙もあって充分に備わっている。よく見れば、戸口部や開き戸・引違い戸・窓を表示、狭間も朱色で配備付けし、水溜り・排水溝に水色、天守台南側と東側の下すそ腰巻に薄緑色で彩色されている。また天守一階（下之重）の中心位置より十字朱線で方位も引かれており、全体的な規模施設が明瞭に分かる。

なお、三重天守の各階の規模や平面間取り・柱割は先掲のA①②③「天守各重地差圖」と同じで、そのうち下之重の中央板張囲い三室（内蔵）に太い柱四本が立つ点は指摘しておきたい（後述するアイソメ図の大黒柱A・Bおよび太柱C・D）。また中之重では太い柱が二本（大黒柱A・B）となっていて、平面上の中心を占めるとみなしうる。

この図に画かれた各櫓は縮尺寸法や柱割から推して次のような規模になる（「」は古図記入の名称）。

「小天守」下之重　八間半×六間、ただし東北部なめ欠き
南室「干飯蔵」と北室（階段・囲炉裏）
玄関（一間半四方）付き、向い唐破風
「上之御重」四間×三間、東西棟

「御臺所」　一二間半×四間梁および三間梁
台所続き北多門（長櫓）　一六間半余×二間梁
「乾御櫓」下之重　五間×五間、ただし矩折れ平面
（東辺三間半梁・南辺三間梁）
「上之御重」三間×二間半、東西棟

西「御多門」　一三間弱×二間梁
二ノ門御櫓下之重　二間半梁×北辺五間余・南辺四間余
上之重　二間梁×北辺二間半・南辺二間、東西棟
（上下とも台形平面）

「二之御門」（楠門下部）　大扉二間両開き・右一間脇戸
「渡り御櫓」（上階）　五間×二間半梁、東西棟
南「御多門」　一四間余×二間梁
「塩御蔵」　五間×二間半
「鉛御蔵」　七間×三間
「楯御蔵」　三間×二間半

D 御天守建前足代之圖〈写真４〉

上袋に右の表題を記し、嘉永再建にあたって足場を組み立てるためのもので、次の三枚が入れられている。

①「**御天守地足代注文附絵圖弐枚之内**」は図の大きさ四一㌢×二九㌢、縮尺百分ノ一として、天守台を朱の破線、その内まわりに天守下之重（一階）四辺を墨実線で引き、「飛朱石垣外角、墨引御建物真」と注記する。天守台の規模を記入、東辺「七丈壱尺五寸程、此側石垣高サ四間半程」、南辺「七丈五尺六寸程、此側石垣高サ四間半程」、西辺「七丈壱尺程、此側石垣高サ六尺程」、北辺「七丈六寸程、此遍石垣高サ四尺程」とある。ただ、概略らしく斜め歪み角度はさほど強調されていない。

②「**御天守地足代注文附絵圖弐枚之内　東南側略圖**」は図の大きさ四〇・五㌢×二八㌢、縮尺三〇分ノ一で、石垣に取　　付く足場側面を朱引きしている。足場四段で、上二段の横木を「杉長丸太」、その下二段を「竹」に指定する。

残る一枚③「**御天守御建前足代略圖**」は図の大きさ九七㌢×四二㌢、同じ縮尺三〇分ノ一、西面の右半分で天守台と多門（長櫓）台は高低差八尺九寸、その上に天守断面を画き、下から上までの足場組みを示す。ここでは石垣取付きの足場を墨線、上方の三重天守にわたる取付き足場を朱線で引き、丸太材・寸尺を記入してある。さらに多門台の下部に足場仕様や指示すべき文が次のように書込まれている。

御臺下ヨリ上之御重迄之足代外廻リハ
大様朱引之通并内廻リ共柱通江杉丸太

建尤御地面者掘立ニ難相成候ニ付土臺居
立候上同際ニ而根堅メいたし布結之儀ハ
杉丸太又大竹共交遣ひ筋違ハ其向ニ應シ

杉丸太又ハ大竹堅方之都合ニ而遣合何連も

錣　堅切込短等入重立候所者棕呂縄結間々

布竹等之所者藁縄結歩行板等廣ク置合
縄結ニいたし外側ニ而諸色運ひ道之所御臺
下ヨリ上之御軒迄都合宜所江だら々々拵へ四方
見隠シハ釣莚よしす等棹縁竹ニ而縄結ニいたし
右足代掛方之儀者下之御重中之御重と
建前ニ應シ追々仕上リ次第出来候筈尤下之
御重ヨリ追々ニ建揃筋違等入候而堅リ次第内廻リ
足代丸太等不用ニ相成候筋ハ取拂仕送リニ遣合
仕候筈
　但　不残建前相済諸職人業ニ相懸リ
　　候節者其職業ニ應シ高サ之所重立候
　　木ハ其侭ニ而小直し等ニ可致筈

石垣取付き足場は②と同様で、天守台上端レベルから足場「壱間半程」に差出して「杉丸太長四間半程」を斜め掛けに立てる。三段目に「柱踏当板」を渡して天守本体に取付けるため「杉丸太四間半余」、下之重の足場より上に「杉丸太長五間半余」、中之重の足場より上に「杉丸太長四間余」を立上げる。また各重入側に丸太をタスキがけで固定し、下之重入側柱わきに「杉丸太長三間余」、中之重入側柱わきに「杉丸太長三間半程」を添付け、同じ入側庇の繋梁上に「杉丸太長壱丈五尺程」を上之重まで立てる。さらに上之重では横木を上下二本とも「杉丸太長四間半程」を差出して組み「布竹」を指定している。

このように①と②が「弐枚之内」と記す如くセットになるもので、まず天守台まわりの規模をみて足場組みし、ついで③において、その上に天守本体が建てられるにしたがって順次、足場を組むのを考えていて、下之重は二段、中之重は三段、上之重は二段にとる計画であることが分かる。

写真４．Ｄ 御天守建前足代之圖（長保寺所蔵）

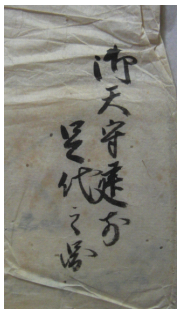
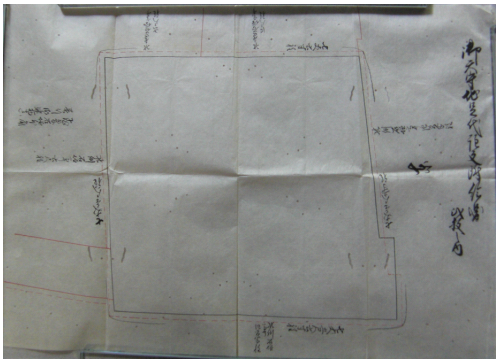
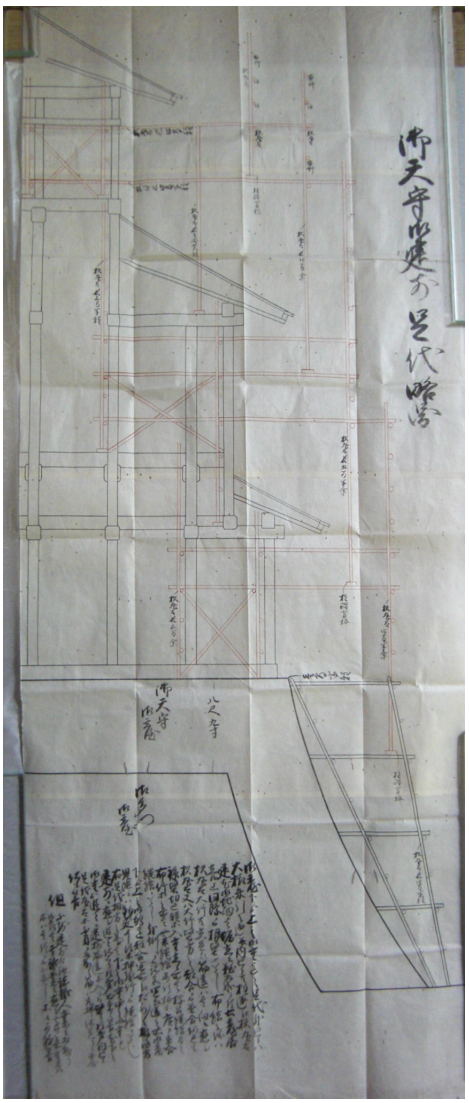


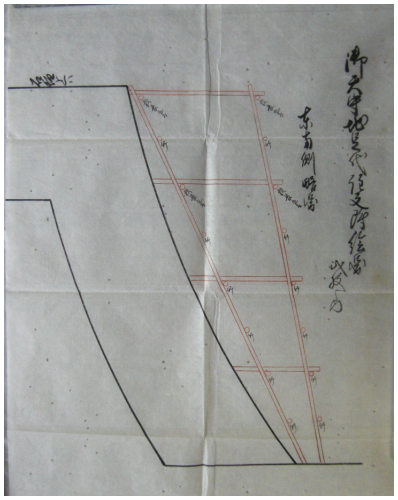
表 題



①御天守地足代注文附絵圖弐枚之内▲



③御天守御建前足代略圖▲



②御天守地足代注文附絵圖
弐枚之内　東南側略圖▲

戦災焼失前の建物を復元するには

長保寺所蔵の古図は弘化三年（一八四六）焼失後、天守再建にあたって作成されたものであるが、平面指図だけでは、その上に立つ建築構成を知るのに十分なものとはいえない。その点、藤岡通夫博士が紹介した水島家の立面図・建地割圖は参考になる〈図2〉。各二枚あわせて四枚で、立面図の一枚は「天守南御正面之圖扣、但三十分一」、また一枚は「御天守西側建地割、但二十分一之圖」と図柄大きく見ごたえするものである。いずれも現在の図法と同様に詳細かつ精緻な作図がされているものの、「建地割」の方は一面の断面図というよりは外まわり軸組の構成を主に示している。

長保寺所蔵Ａ「御天守　地差圖三枚・土臺差圖壱枚・碁盤梁差圖弐枚・小屋差圖三枚」と対応して検討すると梁の架構法や立体的な組立て方など、くまなく考えることができる。さらに『御天守普請覚帳』によって各重の規模や高サ・軒出寸法・用材寸法・建築仕様など詳しく記録してあり、諸書に紹介されている（『和歌山史要』、古川重春『日本城郭考』、藤岡通夫「和歌山城天守とその造営について」、松田茂樹『和歌山城史話』。ただし寸尺に一部、異同がみられる）。次に規模寸尺を摘要、列記する（一間を六尺五寸に換算）。

下之重　東辺十間半（六八尺二寸五寸）
　西辺十間二尺五寸（六七尺五寸）
　南辺十一間二尺二寸（七三尺七寸）
　北辺十間三尺（六八尺）
　階高一丈六尺　軒桁高一丈四尺一寸
中之重　東西八間半二尺一寸五分（五七尺四寸）
　南北八間二尺五寸（五四尺五寸）
　階高二丈七寸　軒桁高一丈三尺四寸
上之重　東西五間半一尺一寸（三六尺八寸五分）
　南北五間一尺（三三尺五寸）
　階高（床板から棟木まで）一丈五尺三寸
　入側化粧桁高一丈三尺　軒桁高一丈一尺
惣高（右垣上より野棟まで）十間半ほど（六八尺二寸五分）

鯱高四尺五寸

とくに下之重の大黒柱（大極柱）四本は内二本が一尺四寸角・二本が一尺三寸角、内廻り一尺角・外廻り九寸角、中之重の柱は内廻り九寸角・外廻り八寸角、上之重の柱は内廻り八寸角・外廻り七寸角と太さ算段をはかっているのが分かる。ただ、原本を見ていないので『覚帳』の寸法と水島家所蔵立面図・建地割圖の縮尺寸尺が合うかどうか確かめえないのは残念である。

他方、戦災焼失前の実測図や写真も参考になると思われるが、先述したように実物そのもの全てを知るには限度がある。なかでも天守各重の上下関係について戦災焼失前の建物は柱筋にズレがあったようで、長保寺所蔵差圖に示す通柱をとる計画と違い施工変更されたらしい。前稿「和歌山城天守図にみる建築構成」でも指摘しておいたように長保寺所蔵Ａ①②③「天守各重地差圖」には下之重の身舎部まわり西入側柱八本を通柱として中之重の西辺外柱へ、かつ中之重の身舎部まわり東入側柱六本と内方一間の筋にある三本も通柱として上之重の東辺外柱へ立ちあげて画かれるが、戦災焼失前ものは二重目柱真・三重目柱真の東側と西側柱筋にズレがあるため通柱とみなせない。実測平面図を見るかぎり東西方向の柱筋に梁間を合わせておき、桁行は中軸に据えて柱を割当てて長サ半間七尺三寸五分の寸法差を両端で柱をずらせて梁の上に立てる方式をとっていたらしい。つまり中之重の桁行長サ八間半は下之重身舎部の桁行長サ八間より両端が少し長め〔半間の寸法差を二分する長サ、三・三五尺／２＝一・六七五尺の出〕、上之重の桁行長サ五間半は中之重身舎部の桁行長サ六間よりも両端が短め〔同様に一・六七五尺の入り〕とされたようである〈**図３**〉。念のため実測平面図を重ねてみるに、上・中之重間は桁行方向のみ合うものの、中・下之重間は柱が全てずれている。

それだけでなく中之重の南外辺と張出部もまた不審な点がある。Ａ「天守各重地差圖」・Ｃ「天守曲輪平面古図」の天守掛紙では下之重より半間ほどの逓減を示すが、戦災焼失前の平面図では中之重の南外辺ラインが下之重の南外辺寄りギリギリとなっている。その点、戦災焼失前の写真や高田徹氏紹介の絵ハガキを参照しても錯覚によるためらいあるものの、やゝ前方に迫っているように見え、まだ疑問の余地が残る。

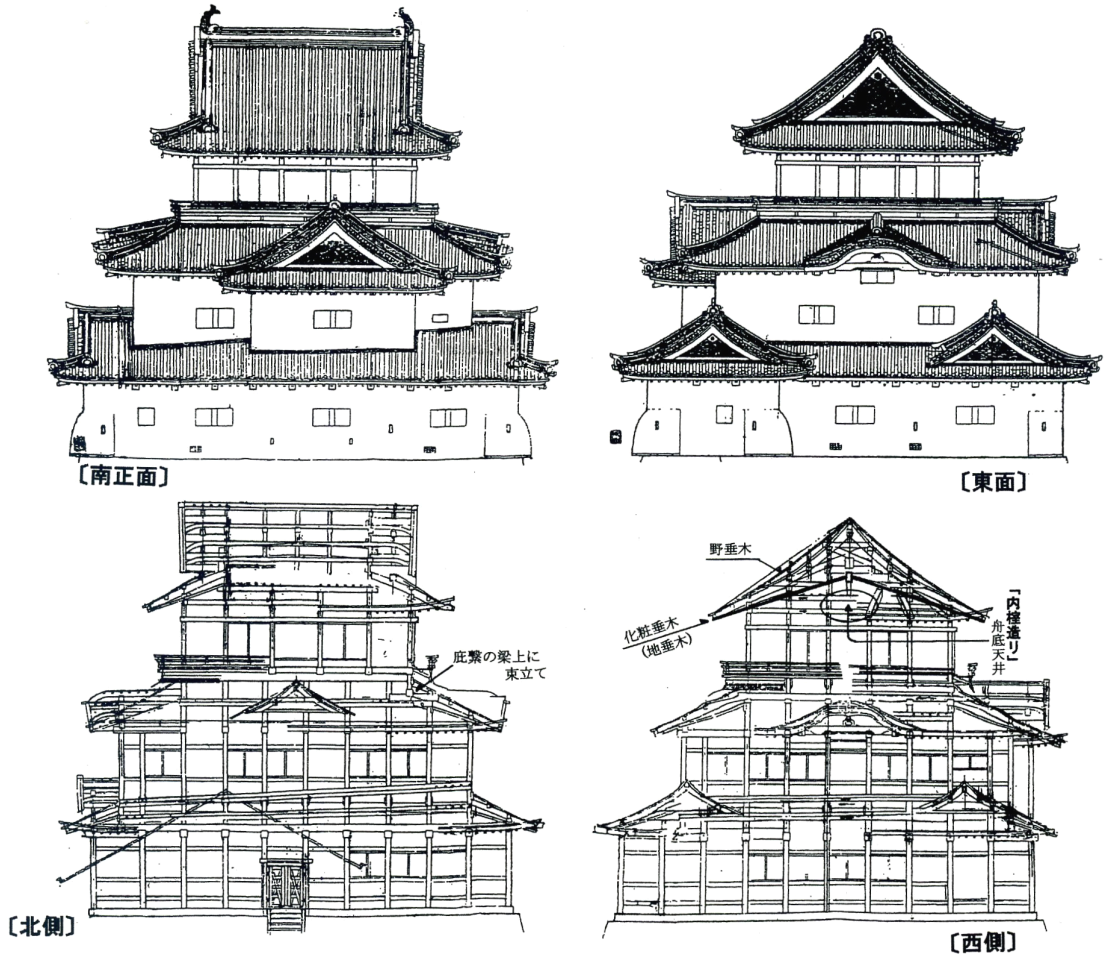


図２．水島家の天守立面・建地割圖(藤岡通夫博士、松田茂樹氏の著書より)

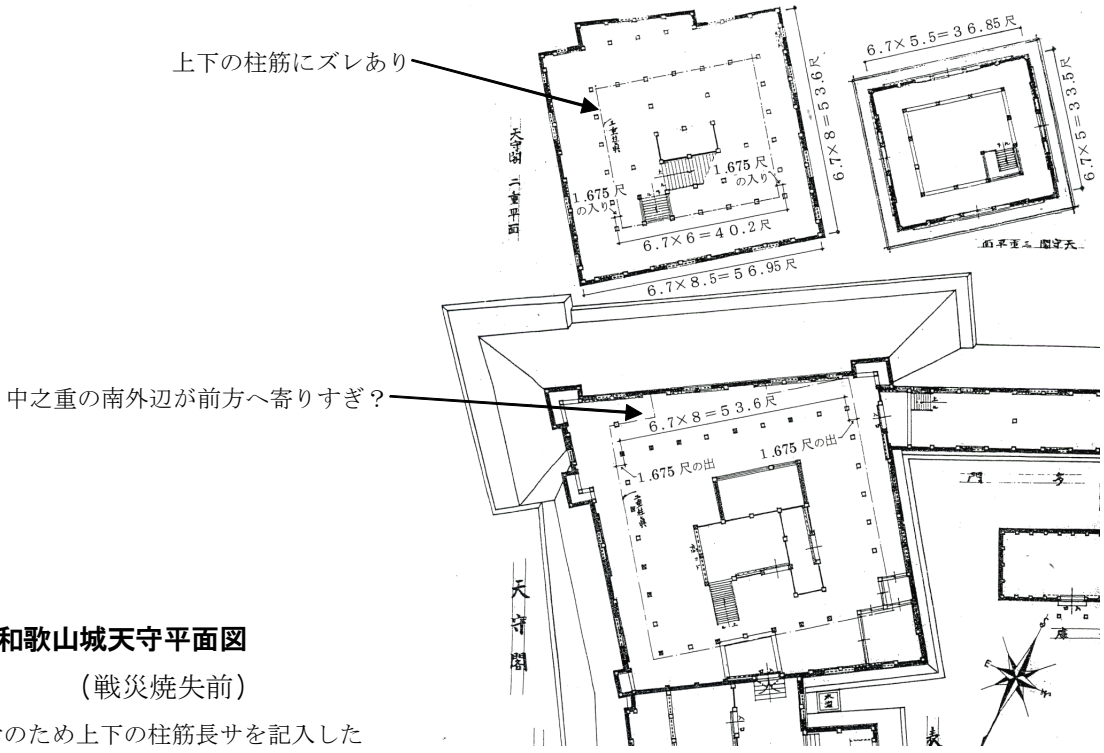


図３．和歌山城天守平面図

（戦災焼失前）

※参考のため上下の柱筋長サを記入した

差圖からアイソメ起こし

このように戦災焼失前の建築構成を完全に把握できない個所があるため、復元することは容易でない。とりあえず、本稿では嘉永再建が成って戦災で焼失した実際の姿をうかがえないので、長保寺所蔵の古図・差圖に基づいて天守の建築構成を等角アイソメ図に描き起こしてみた。もとより戦災焼失前のものに忠実な復元は望めないものの、軸部の立上げ方や梁組み工法が分かりやすいように、下之重（一階）は平面上の軸部立て図と柱上に架ける梁組み図、次いで中之重（二階）も同じく軸部立て図と梁組み図の両図を掲げ、さらに上之重（三階）まで建ち上がり構成図という順に、それぞれ建築されるさまを試みた。ただ、等角アイソメなので背面が見えず重なる部分があるが、いささか天守の構造および大工棟梁の手になる指図の内容、すなわち設計計画のほどが理解できるのではないかと思われる。

そこで等角アイソメ図の、下之重から中之重、中之重から上之重へわたる構造や上下関係について説明する。

まず下之重の軸部立て図〈**図４－１**〉を見ると、平面間取りは身舎部（八間×七間）の周囲に入側をまわし、差圖上では破線を引いていて無目敷居を表すと思われるが、戦災焼失前の内部写真を参照すると敷居は入れず内法高に貫を通して堅めるだけで一面板敷き（惣板間）であった。身舎部は通常なら田字型に間仕切るべきところ、中央の板張囲い内蔵三室〔各室の面積は六坪・四坪半・三坪の広さ〕を独立的に設ける。四坪半室（一間半スパン）の南辺が柱間の中筋になるのを除いて柱筋を合わせるものの、内蔵三室の巴状くい違い間取りが不揃いになる点は特殊な形式で類例をみない。

Ａ－①「御天守下之御重地差圖」が示す如く身舎まわりの西入側柱八本（西通柱1～8）および中央板張囲い部分の柱四本（通柱９・10 大黒柱Ａ・Ｂ）を中之重へ立ちあがらせる。なお、Ｃ「天守曲輪平面古図」を参照すると太い柱四本のうち大黒柱Ｂと太柱Ｄは四坪半室の東辺両隅、大黒柱Ａと太柱Ｃは同室西辺より一間内側の位置にあてている。しかし太柱Ｃ・ＤはＡ－①「天守下之重地差圖」も同様に太い柱を示しており、中之重では該当する柱が無いかわりに、Ａ－⑤「御天守下之御重御盤梁之圖」を参照すれば下之重の柱筋に無い下梁を支えるのみで通柱としないことが判明する。そうすると大黒柱Ａ・Ｂはほぼ中心をなし、ゆえに太さ一尺四寸角、太柱Ｃ・Ｄは一尺三寸角である（大黒柱ながら通柱でない）と考えられる。

これは下之重の柱上に架ける梁組み図〈**図４－２**〉をみれば肯首でき、西通柱1～8と通柱９・10および大黒柱Ａ・Ｂ、下梁（下木）と上梁（上木）の組合せ関係が分かる。中之重の外まわり規模は八間半×八間、下之重の身舎まわり八間×七間より大きめで、西通柱筋を除く三方において半間出る位置で入側庇の繋梁上に柱持梁を渡す必要がある。そして南北方向の上梁（大引も兼ねる）に柱を立てるので、中之重平面の柱割が計画され、柱を半間ズレ筋にのせて配することも可能である。その点、下之重の梁組み図に黒柱割の配列を表示した。

そうして梁組みの上に床を敷き、先の柱割による平面設定に応じて柱を立てれば、中之重の軸部立て図〈図５－１〉のような構成となる。Ａ②「御天守中之御重地差圖」では身舎部を南列（二間スパン）と北列（二間スパン）に分け、南列は二間梁ずつ三部屋に区画（さらに中央間に板張囲いの小室二坪をとる）、北列には上り口と中段折れ階段を設けている。柱割から六間取りを形成するようにみえるものの柱筋は破線を引いており、この階も下之重と同じく一面板敷き（惣板間）で敷居を入れず内法貫を通すだけであった。

ここでは身舎部の東通柱１～９がそのまま上之重の東外柱として立ちあげて東西方向に下梁を架けるが、外まわり両端一間半あて逓減するため、反対側の西柱筋が中之重の柱筋より内方へ半間ずれることになる。くりかえし述べたように下梁は段差の掛継ぎ処理して上梁を受けねばならない。この部分、Ａ⑥「御天守中之御重碁盤梁之圖」では下梁（下木）が二本重ね段違いに画かれ、ちょっと分かりにくいけれども、水島家の建地割圖を見ると庇繋の梁に束立てして上梁を支持する部位が認められる。よって中之重の柱上に架ける梁組み図を描き、上之重の外まわり・身舎部に黒柱割で配列を表示した〈図５－２〉。

こうして上之重の建ち上がり構成図にいたって、東通柱１～９の上下関係や軸部・小屋組などの様子を考えることができる〈図６〉。内部は身舎まわり入側柱間に無目敷居を入れるが、鴨居・内法長押は打たず下・中之重と同様に貫二筋を通して堅める。戦災焼失前の三階内部写真を見ると板敷きのままであるが、『御天守普請覚帳』には惣畳敷きと記されている。

なおアイソメ図では、軸部・梁組み構成を見やすくするため、屋根は初層のみとし垂木・瓦葺を略したが、上之重の小屋組は水島家の建地割圖にならって桔木を入れ扠首に組むところを表現してみた。その点、『御天守普請覚帳』に「内榁造リと申儀ハ棰弐重に仕、化粧棰江裏板張同上野棰之間ニテ小屋木道具組堅メ業合手口御座候」（傍線筆者）とあり、戦災焼失前の写真により化粧屋根裏・舟底天井〔棹縁太め、入側とともに化粧垂木（地垂木）の延長材をなす〕とした手法が認められる。それに初層・二層目も最上層と同じく化粧垂木と野垂木で野屋根（桔木入り）を構成して掛ける。

松本城・彦根城・松江城天守などは最上階に天井を張らず野物材で径太く曲がり状のまま力強い梁組みを誇示し、城郭建築らしく豪放感を払う例が多いものの、和歌山城天守のそれは磨き直材で「内榁造リ」と称するからに洗練されたデザインとなっている。江戸後期の再建でありながら、柱・貫・差物・梁組みなど入念な仕事で仕上げられており、むしろ特色を見出せるのである。

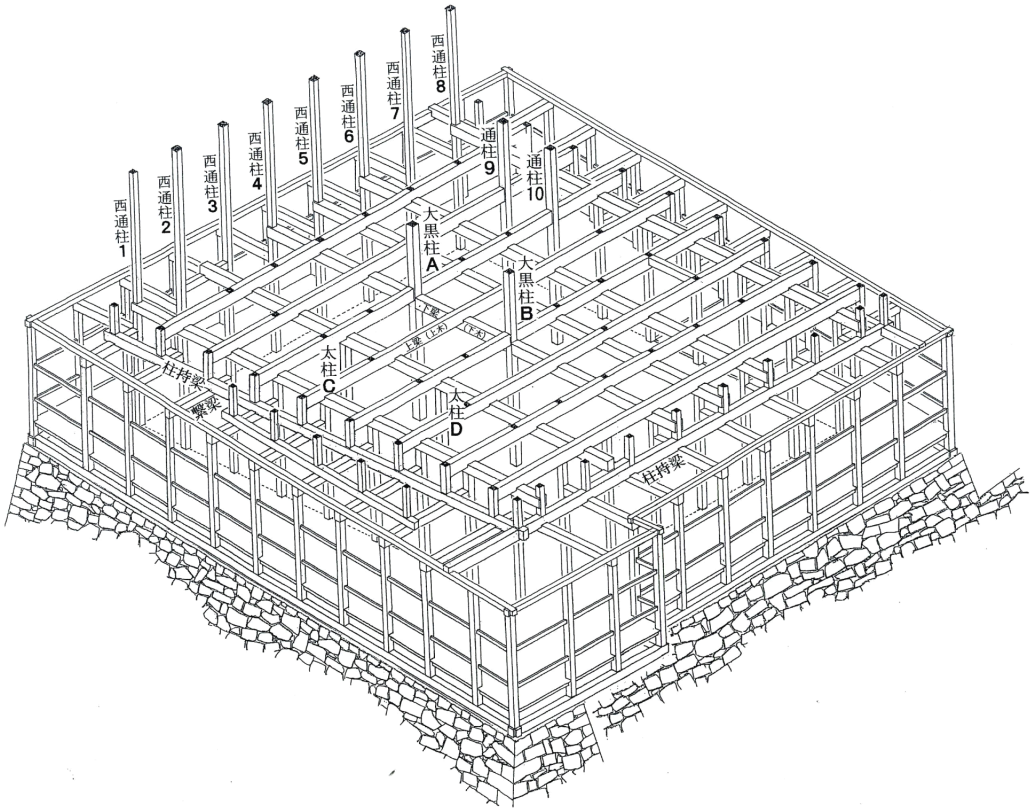


図４－２．下之重 柱上の梁組みアイソメ図

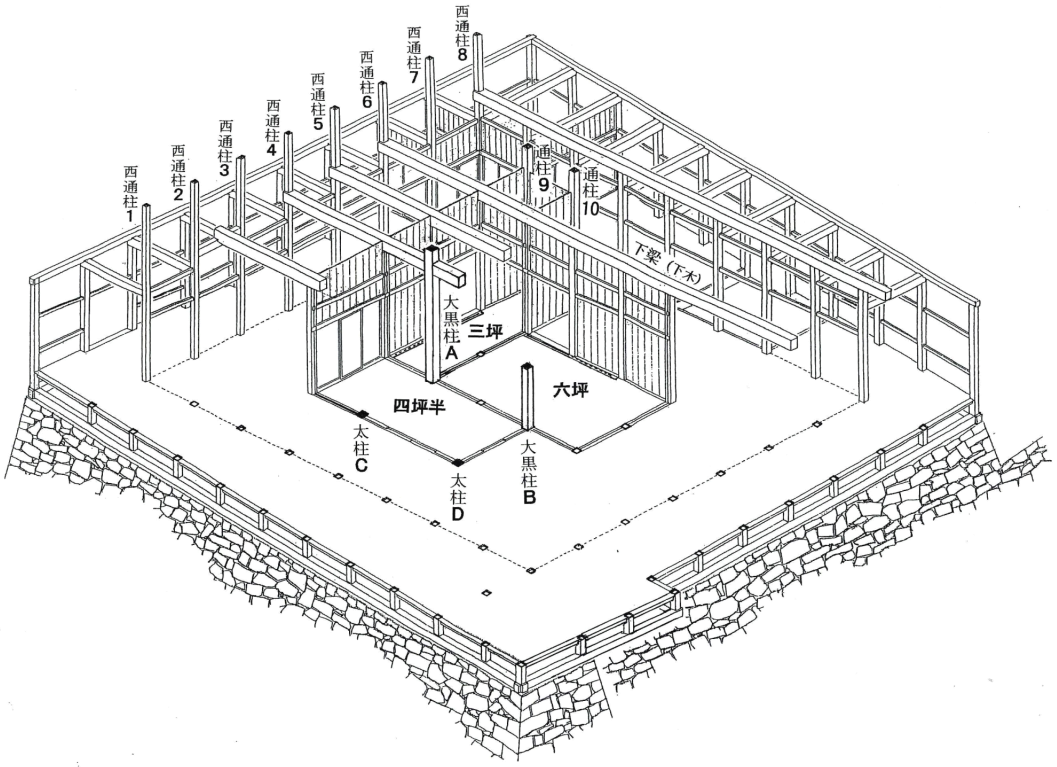


図４－１．下之重の軸部立てアイソメ図

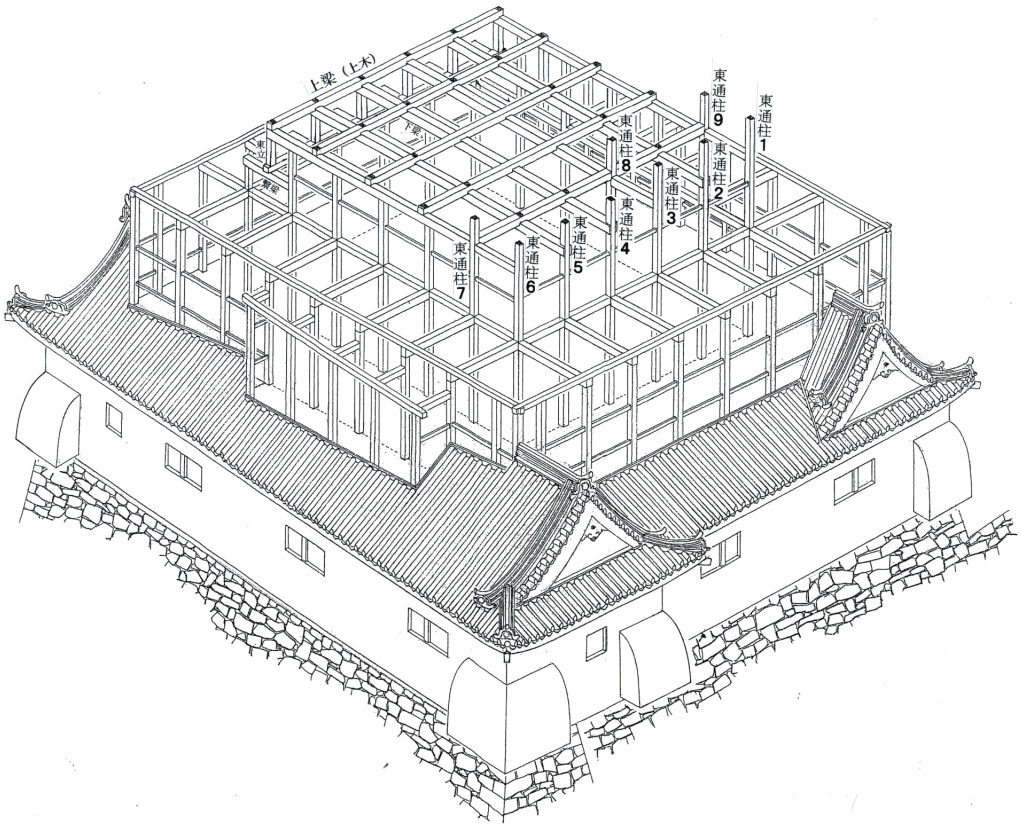


図５－２．中之重 柱上の梁組みアイソメ図

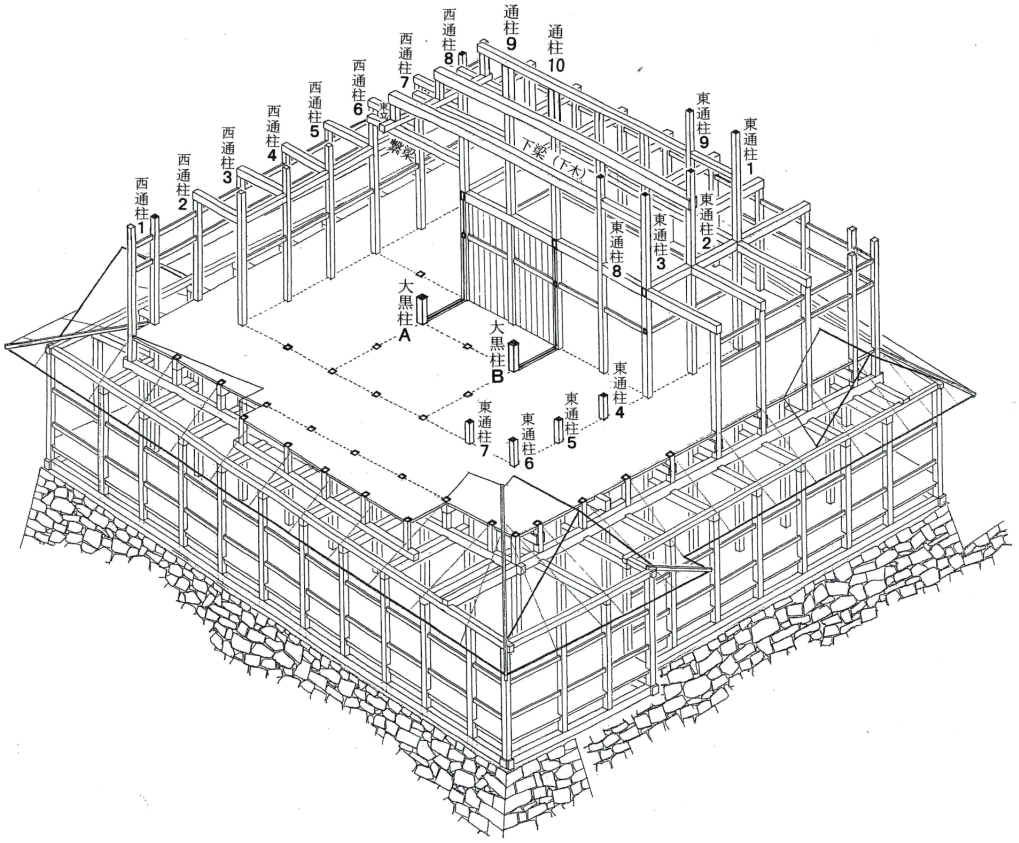


図５－１．中之重の軸部立てアイソメ図

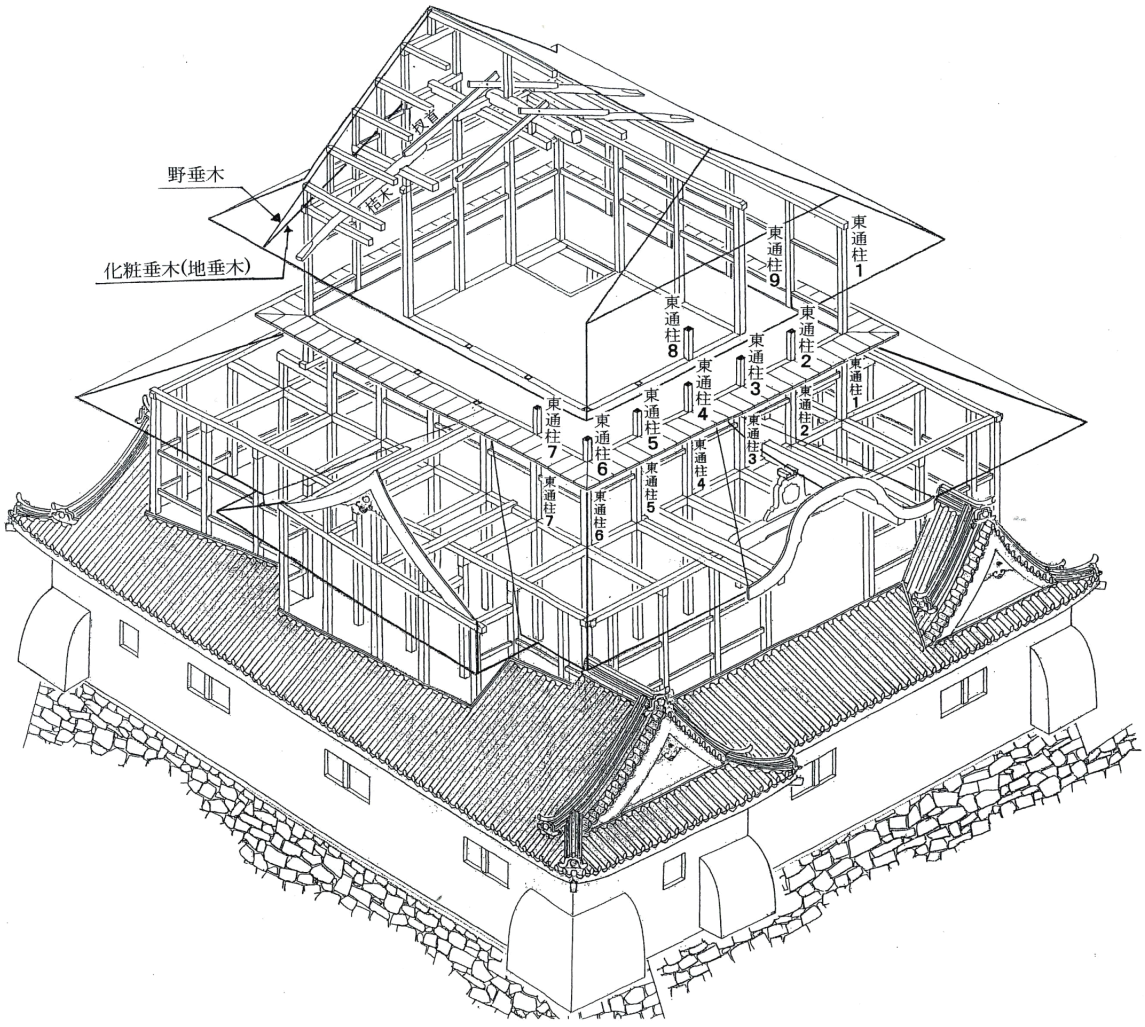


図６．上之重 建ち上がり構成アイソメ図

おわりに

ところで鉄筋コンクリート造の天守閣を復興するに際して、復元考証・建築設計を進めた藤岡通夫博士は水島家所蔵の立面図・建地割圖によって木造模型二〇分ノ一も製作指導されていた（現在、和歌山城天守閣の一階ホールに展示）。この木造模型はかなり精巧にできており、本稿で描いてみたアイソメ図よりも実際的である。自身、戦災焼失前の建物を見ていないし、内部の軸部・梁組み工法や細部様式などに差異があり、あるいは自身こそ誤りを犯しているかもしれない。

その点はともかく、長保寺所蔵の和歌山城関係古図について考察し、画かれた内容を検討してきた。さらに平面指図（地差圖）から立体的（三次元）構成や技法いかんも問うてみた。そのためＡ⑤⑥の碁盤梁之圖および⑦⑧⑨の小屋差圖が揃っているに加えて、水島家の建地割圖も補って建築構造を推し量ることができるのである。それにしても具体的かつ正確に作成されていることが知られ、差圖表現に工夫を凝らした技倆のほどがうかがえて興味を覚える。また差圖（指図）は大工棟梁による設計計画という面もあり、現実に建てられた戦災焼失の建築と違う部分も指摘されるので（別に施工図・現場実寸図を作成する場合がある）、広い意味で解釈すべきと乞う次第である。

いずれにしても絵図・指図・文書は先人の知恵や工夫がこめられた歴史文化遺産であり、学びとること多く貴重な史料といわねばならない。

《謝　辞》　本稿をまとめるにあたって、貴重な史料の閲覧調査にご配慮ご教導たまわり、論考掲載にこころよくご許可いただいた長保寺住職瑞樹正哲師に御礼を申し上げます。また和歌山市立博物館高橋克伸氏から資料提供・ご教示を受けたことも付記して感謝いたします。

【参考文献】

和歌山市役所『和歌山史要』（大正四年）

古川重春「和歌山城（竹垣城）」
（『日本城郭考』巧人社書店、昭和一一年）

藤岡通夫「和歌山城天守とその造営について」
（『建築学会論文集』一七号、昭和一五年）

文化財保護委員会「和歌山城」（『戦災等による
焼失文化財・建造物編』便利堂、昭和三九年）

松田茂樹『和歌山城史話』（帯伊書店、昭和五〇年）

読売新聞和歌山支局『和歌山城物語』

（ゆのき書房、昭和六二年）
藤岡通夫「戦災焼失を再建した和歌山城天守群」
（『城と城下町』中央公論美術出版、昭和六三年）
和歌山市史編纂委員会『和歌山市史』第二巻（平成元年）
和歌山市立博物館『南海の鎮・和歌山城―その歴史と文化』
（平成一九年）
高田徹『和歌山城残照―絵葉書から見た近代の景観』
（私家版、平成二一年）